

2021/10/14-2

(うと Q 世話し+オマケの英語教室 本当に「勿体ない」 really, truly “Mottainai story” indeed.)

受験で長文読解というのが在ります。

やたらと関係代名詞 (that, which, whom 等など) や条件文 (if)、時制と完了形を組み合わせた複雑な構文などがごちゃごちゃと入り交じった文章が出てきたりします。

そうしてそれを読解できないと試験に落ちる。

しかし、現実の会話やビジネス文章始め私的な文章に於いてもそんな話し方をしたり書き方をしたりすれば、まず間違いなく「嫌われ」ます。

ですからみんなそんな話し方はしませんし、そんな書き方もしません。

むしろそうならない様に気をつけているはずです。

これに関しては何も英会話に限らず、我が国国内で同朋同士話すときでも一緒でしょう。

書くにせよ話すにせよ「相手にわかりやすく表現する (伝える)」というのがコミュニケーションの大原則だからです。

ところが冒頭のような複雑でトリッキーな文章が外国では一般的で、それが話せたり書けたり出来ないことには何事も始まらないと勘違いしてしまうと英語を話そうという気力が沸いてこなくなります。

そういう意味ではこの「ふるいに掛けて落とすための引っ掛け粗探し英語」というのが、我が国国民が「英語を始めよう」という気力をそぎ落とす役割しか果たしていない様な気がするのです。

「言葉というのはコミュニケーションを円滑にする為の道具だ」と言う原点に立ち返れば直ぐにも分かりそうな事なのですが、案外教える側はそれに気がついていないようです。

話し言葉にしても書き言葉にしても長い一文である必要は全くないのです。

短い文章に区切って、それを続ければいいのです。極端に言えば単語だけの部分があっても何ら差し支えないのです。相手に伝わりさえすれば。

後の全ては定型や定式に合致するか否かを判定する受験の様な審判ではなく、相手が自分の話を分かってくれるかどうか、興味を持ってくれるかどうかの「その場の運用」の問題ではないのです。

定位や定式外のものがたまに混じっていたとしても、直上の目的にかなっていれば外国人は気にもとめませんし粗探しもしませんので、間違えることを恐れて自分の方から話しかけるのをやめる事程勿体ないことはないのです。

そもそもコミュニケーションとは往々にして「当初お互いが抱いている思い込みや情報不足によって知らぬ間に生じた誤解の訂正の仕合っこ」みたいなものです。

その訂正の仕合っこが出来ないというのは、実に実に大きなチャンスロスとしか言い様がない様な気がします。

本当に、本当に

「勿体ない」

話だと感じておるところで御座います。

Really, truly “Mottainai story” indeed.